

洋菓子専門店ショコラに訪れた幾つかのバレンタインの物語

MENU

峰岸航太のリバースバレンタイン ----- P6

恋い焦がれる気持ちが積もればそれはミルフィーユ

工藤友実のシングルバレンタイン ----- P16

そっぼを向かれた私の恋心は加熱しすぎたカラメル味

柊翼のリバースバレンタイン ----- P36

いつも側にいた人は毎日の生活へのフォンダン



バレンタインの明け方に ----- P4・5

静かな夜明けを満たす少女達の名前はクレメ・ダンジュ

バレンタインの朝に ----- P14・15

朝から罪悪感に悩まされる私の心の色はカカオマス

バレンタインの昼に ----- P34・35

ティータイムにお似合いなのは恋の話とショートブレッド

バレンタインの暮れ方に ----- P44・45

青年の想いの果てに贈られるのはバーチ・ディ・ダーマ

装幀
鈴響雪冬

よ^うが^しせん^{もん}てん^{てん}ショコラに訪^{おとず}れた

幾^{いく}つかのパレンタインの物^{もの}語^{がたり}

バレンタインの明け方に

「私なら、今食べているのを口移しで、かな？」

直後、十数枚のタイルを床に叩き付けたかのような音が厨房を満たした。

「歪んじゃうから気をつけてよ」

「す…すいません」

床に落ちたステンレス製の焼き型セルクルを全て拾い上げてから、工藤は私に向かって頭を下げた。それを確認してから目を手元に戻して、粉シフタふるいで砂糖をかける作業を再開する。

「私の答えはそんなに変？」

「えっ…あ…芹沢さんらしいと思います」

「それって、私が変わること？」

「そ、そんなことはありません！」

「それならいいけど。それで、貴方はどうなの？」

「えっ？」

「だから、後で食べようと思って取って置いたチョコレートトを彼氏が食べているのを目撃した時の対応」

砂糖をかけ終わったスコーンをバットから展示用のト

レイに移し替えながら、さつき自分がされた質問を工藤にそのまま返す。トレイの上では雪化粧をしたスコーンが、女の子の笑顔を待っているように見えた。

「えっと…私は…」

「私は？」

「怒っちゃうかも…しれません」

「食意地張っちゃ駄目よ」

「えー、だって、せっかく楽しみにしていたチョコですよ？ もう一個同じのか、もつと値段が高いのを買って貰います」

「じゃあ、その時はこの店をお願いね。電話してくれば、もの凄く高く付くケーキを用意しておくから。無駄にトリュフとかをトッピングした」

「それ、いいですね」

移し終えたスコーンをトレイごと調理台の端に移すと、冷蔵庫からしっかりと冷やした生チョコを取り出す。コ

コアパウダーを手元に寄せ準備を整えると、一センチほどの厚さに伸してあった生チョコに、お湯で温めた包丁を入れる。するとそれはゆっくりと音も立てずに沈んでいった。取り出した全ての生チョコを賽まきの目に切り分け、コアパウダーを振りかけようとして――

「あー」
新しいシフターと綺麗なバットがないことに気が付く。一旦作業を中断して、壁に取り付けられた戸棚の扉を開く。

「それにしても、何が楽しくてバレンタインに女二人で朝早くから作業をしているんでしょうね」

「私の台詞を代弁しなくてもいいのよ」
さっきのそれより大分小さい、よく見かける食品トレイのようなバットを取り出す。

「でも、何もすることがないよりはいいですよね。それに、この時期にチョコを買っていく女の子って、みんな可愛いじゃないですか。見ていただけで幸せになりそうなほどの笑顔を振りまいて」

「そうね」
バレンタインか……。あの男の子、上手くいけばい

いけど――。

あれ？

気が付くと持っていたバットが無くなっていて、厨房にぐわんぐわんと音が飛び散った後だった。

「これでおあいこですね」

「あー、そう言われるとなんか悔しい」

「芹沢さんにしては珍しいですね。考え事ですか？」

「んー：ちよつと気になる男の子がいてね――」

そこまで言って、しまったと思った。もうすこし言葉を選ぶべきだった。

「うわー：それって恋ですか？」

わざとらしく大きな溜め息をつき、私はどうやって矛盾を変えるか考える。ここで必死になって弁解するのもまた面倒だ。だとしたら、話を曖昧にしておくのが丁度良いのかも知れない。それに、あながち嘘でもないのだ。
「まあ、そんなところ」

ヒマワリの種達の中から淡泊な実を必死に取り出そうとしているハムスターのように目を輝かせながら質問を浴びせてくる工藤を軽くもてあそびながら、私はこの間の男の子のことを思い出していた。